
真昼の星のその下で

碧檜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

真昼の星のその下で

【コード】

N2029E

【作者名】

碧檜

【あらすじ】

「闇の眼光の手」の番外編をまとめています。本編第1部をお読みになった後ご覧下さい。

真昼の星のその下で（前書き）

本編読了後にお読みいただくことを推奨します。

真昼の星のその下で

真昼の星のその下で

その日の空は久々に雲一つない、真つ青な空だった。

少年は、今日も彼の母の墓の前から動かない。彼は母の葬儀以降、もう1週間もそうしている。

うだるような熱気が、辺り一面に籠り、彼の小さな体は、水分を失って萎びてゆく。

彼の黒い瞳からは留まることを知らないかのように、涙が川を造っていた。

「皇子、お願いです。せめて日陰にいらして下さい」

背の高い大きな男が、少年の腕を掴む。

「いやだ。母さまの側を離れるのは。僕が側にいないときっと母さまは悲しむ」

男の影から一人の少女が心配そうに顔をのぞかせる。金色の髪が、日の光の中で蜂蜜のように輝いている。

「ねえ、どうしたの」

少年は答えない。

しかし少女の顔を見ると、少しだけ涙の勢いが弱まった。

男は、ため息をつくとき、少女に何か耳打ちして、荷物を持たせその場を去った。

この少年は、なぜかこの幼馴染みの少女の前では少しだけ強くなる。

幼くとも、いっぱしの男のような顔を見せるのだ。
彼女の前でも立ち直ろうとするかもしれない、そう思った。

少女は大きな薄い布を荷物から取り出すと、少年と自分の上に軽く引つ掛けた。

少年も少女も真っ白な肌をしているため、ひどく日に焼けやすい。すでに少年の腕は赤くなり始めていた。

おまけに少年の髪は炭のように真っ黒で、触ると火傷しそうで、らい熱くなっていたのだ。

「暑いね」

少年が少女を見ると、彼女の額にはすでにびっしりと汗の玉が浮かんでいて、顔もかなり赤くなっている。

それでも少女は少年の側を離れず、一緒に墓の前に座り込んでいた。

少年は少しだけため息をつく、少女の手を取って、木陰へと移動する。

自分だけなら、いい。

でも少女が辛そうなのを見るのは嫌だった。

木に寄りかかって、じつと墓を見つめる。

涙は少女が隣に来た時に一度乾いていた。

しかし、墓を見つめていると、母との思い出が浮かび上がってきて、それがもう二度と増えることが無いということが心に迫って、涙がどうしても止められなくなる。

「母さま……」

「泣かないで。あたしが、あたしがずっと側に居てあげるから」

少年は少女を見つめた。

緑色のその瞳が、力強い光をたたえて少年を見つめていた。

少年はその光にすぎるように、彼女の瞳を見つめ返す。

「本当に？母さまみたいにぼくを置いていたりしない？ずっとぼくと一緒にいてくれるの？」

「置いていたりしないわ。あたし、あなたが好きだもん。だからずっと一緒によ」

少女ははっきりとそう言った。

「本当だね？ぜつたいだよ？」

「ぜつたいよ。約束するわ」

「約束」と聞いて、少年の頭の中に一つのことを思い出された。母がやさしく少年に語ったその言葉。

あなたにもこの先、すごく大事な人が出来るでしょう

その人を手放したくない、そう思ったなら、あなたの大事な名前を覚えてあげなさい

それは大事な大事な「約束」になる

そうすればきっと、その人はあなたとずっと一緒ににいけるから

少年はその意味を正しく理解はしていなかった。

しかし、母を失ってしまった彼は、大事なこの少女まで手放すのは嫌だった。いつまでも一緒にいて欲しかった。

「わかった。じゃあ、約束のしるしに、ぼくの名前を教えてあげる」

気がつくとも少年は少女に自分の大事な「名前」を教えていた。

少し離れた木陰に、先ほどの男と、少年によく似た美女が立ってその様子を眺めていた。

女は墓の主の妹、そして少年の叔母だった。

「あらあら、かわいらしいこと」
「……」

ひどく嬉しそうな女とは対照的に、男はひどく不機嫌そうだった。それもそのはずで、少女は彼の娘なのだ。

名前を教える、その意味を男はよく知っていた。

彼は娘を一人である場において来たことを、後悔したが、時既に遅し。

娘は将来少年の伴侶になる約束をしまっていた。

「これも運命なんじゃないかしら？……あなたと姉さんが結ばれなかった代わりに、その子供たちが」

「……面白がらないでもらえますか。私は今すごく不機嫌なんです。大体、私と彼女はそんな関係ではありませんでした。何度言えばいいんですか」

「まあた、強がっちゃって」

女は、知っていた。

男が、彼女の姉を慕っていたこと。

その二人を引き裂いた自分に気を使って、ずっとそんな風に言うてみせること。

そう自分を偽っていること。

もうそれは過去のことなのだろう。

しかし女はそのことを一生忘れないつもりでいた。

だから、彼女は恋をしない。

いつか、彼がそれを素直に認めてくれれば。

そのときやっと、彼女は呪縛から解き放たれるのかもしれないかった。

男は、ひどくイライラしながらも、少年の顔が輝き出すのを見て、あきらめたように大きく息をつく。

「まあ、子供の言うことです。大した意味は無いんでしょう」

そう自分に言い聞かせるようにして、男は少年たちに背を向け屋敷の方へと戻っていく。

これで二度目だ。

一度目は、彼の幼馴染み。想いさえ一度も伝えられなかった、あこがれの女性。

二度目は自分の大切な一人娘。

「彼ら」はそうやって自分から大事なものを奪っていく。

いくらその愛しい思い出の女の息子ひとと言えども、そう簡単に許す

わけにはいかなかった。

しかし。

もともと少年と少女を引き合わせたのは自分なのだった。

幼馴染みとしての親しみが、恋に変わる可能性が高いことを身に染みて知っているくせに。

でも、その関係もこの夏までだ。

もう少年がこの土地を訪れることは無いだろう。

彼の母が亡くなった今、この土地への里帰りの機会は与えられない。

時が彼らの幼い約束を風化させてしまふに決まっていた。

*

夏が終わり、少年が城へと帰る日がやって来た。

少年は、少女が一緒でないことにひどく動揺し、馬車の扉が閉まる頃には、泣き出していた。

「いやだよ！一緒じゃないとうちには帰らないよ！ぼくたちは約束したんだ！ずっと一緒だって！」

「……泣かないで。あたし、いつかお城に行くわ。今は一緒に行けないけど、きつと行くから。あたしが守ってあげる。あなたが泣かなくてもいいように」

少女は涙をこらえ、必死で少年に向かって言いきかせる。

彼女は必死だった。

少女は父にもう少年に会えなくなるということを聞いていた。

だから、最後に見る少年の顔は、笑顔がいい、そう思っていた。

少女に懇願され、少年は必死で涙を止める。
少女が泣かずに堪えている、それなのに自分が泣いているのは恥ずかしかった。

馬車が発する直前、ようやく、少しだけ笑うことが出来た。
少女は、それを見て安心したように、微笑んだ。

馬車が発つ。

少年の姿が見えなくなったとたん、少女は涙を堪えるのを止めた。
堪えていた分の涙がすべて流れきるまで、少女は泣き続けた。

*

そして10年後。

少年と少女は真昼の星の下で交わした幼い約束に導かれるように
再会を果たす。

真昼の星のその下で（後書き）

文体、人称、視点等すべて本編と変えています。
この番外編ではいろいろ実験をしてみようと思っています。

真昼の星のその下で

i n t h e H o t S p r i n g (前書き)

第1部終了後の読了をお勧めします。

第1部と第2部の間のツクルトウルス、アルフォンスス家での出来事。

真昼の星のその下で

in the Hot Spring

「皇子殿下。湯殿が用意できました」

「ああ、分かった」

侍従の声に僕は立ち上がると部屋を出る。先ほどまで書簡に目を通していた。アウストラリスへ送る、招待状だ。

そう、即位式では諸国の賓客を招く。そしてその賓客は大抵王族や皇族。アウストラリスの場合は、きつと数多く居る王子の一人が国を代表して出席するはずだった。

僕は顔を知る王子を思い浮かべながら筆を走らせ名を入れた。彼女は僕のものだ。もう誰にも渡さない。お前にも。

アイツはこれを見てどうするだろう。素知らぬ顔で出席するだろうか。そして隙あらばかすめ取るうとするだろうか。それとも、他の王子に役を任せて様子を伺うのだろうか。

僕はアイツがどうする気なのか。それが知りたかった。諦めてくれたのならそれで良い。でも、そうとは思えなかった。僕がアイツだったら……きつと何が何でも奪おうと思うに決まっているからだ。

服を脱ぐと、冷気が肌を刺す。ツクルトウルスの春はまだ来ない。そしてこの湯殿は珍しくも屋内にも屋外にも据えてあり、僕は外で空を見ながら湯に浸かるのが好きだった。

ここで使う湯は温泉。源泉がかなり熱いため、冷気で冷ましてちょうどいい温度となる。夏は川の水と混ぜないととても入れる物ではない。

肩に冷たい物が触れ、空を見上げると夜空を雪がちらついていた。飛び込むように湯につかる。強ばった肌が一気に緩む。温度差にぴりぴりと肌が痛んだが、目を閉じて堪える。しばらくそうしていると肌が湯になじみ、ようやく痛みが落ち着く。

そのまま池のように広い風呂を奥へと進み、お気に入りの場所へ

と落ち着く。岩に囲まれた一角。源泉が近く、熱めの湯と注ぎ込む水音が楽しめる。

「ふう」

息を吐ききると、手足を伸ばし空を見上げた。水面から上がる湯気で辺りがかすんでいた。

こうしていられるのもあと少し。近いうちに僕たちは皇都に戻る。そして、戻れば皇子として務めを果たさねばならない。おそらくこんな風に空を見上げて心を休ませることもなく。

なぜかひどく不安だった。

僕は上手くやれるのだろうか。

自分が子供だと言う事は一連の事件で思い知った。僕は何も知らない。権力を操れるだけの力も、才気も持たない。とにかく持ち駒が少なすぎた。

信頼できる人間は叔母とレグルスと、スピカだけ。当然と言えば当然かもしれないが、父さえもまだ完全には信用できなかった。

ルティの裏切りは僕の心に影を落とした。レグルスが連れて来て、信頼していたというのに、あんな形で裏切られたのだ。

こんな状態で、敵だらけの宮に戻って、僕は一体何が出来るというのだろうか。皇位の継承が決まってしまった今、僕が役に立たないと知れば、誰もが僕を傀儡にしようと企むだろう。これから、僕の元には僕の義理の親になるがため、娘を差し出す貴族が次々に連なるだろう。

僕にはまだそれに対する何の用意も無い。

武装した兵の中に丸腰で飛び込むようなものだ。

もちろん考えなければならぬとは思っている。スピカのために、ただ、どうして良いのか途方に暮れてしまうのだ。

スピカの身分。そしてその力。皇子である僕と一緒にするには障害が多かった。身分一つだけでも頭が痛い問題なのに。

逃げてばかりいても駄目な事は分かっていた。少ない武器で

も、戦わなければならぬ。僕とスピカの居場所を宮に何としても作らなければならぬ。彼女を手にするのなら皇子を辞めると言う人間も居るだろう。でも僕はその地位を失えば、何の力も無い人間だ。好きな少女一人守る事の出来ない、ただの子供だった。今その地位を手放せば……スピカはルテイにいや、彼だけではない。他の男達にやすやすと連れ去られてしまう。僕は皇子の権力を振りかざしてでも、いくらその姿が情けなく滑稽でも……彼女を守らなければならぬ。

力が欲しい。真に自分に付随する力が。

僕はあの事件からずっとそう思い続けていた。

僕は頭まで湯につかる。

室内に戻って、体を洗わなければ。適当にすませるとスピカに怒られる。

体を誰かに触られるのは極力避けて来た。普通皇族であれば一人で湯浴みなどしないはずだけど、僕は誰かが一緒なら湯など使わないと宣言していた。世話をしてもらおう事自体に……ひどく嫌な思いが出たから。

あれ以降僕の肌に触れた人間はスピカだけだ。

あの柔らかい肌に触れたかった。抱きしめて、存在を確かめて、安心したかった。

彼女だけだった。怖がらずに全部預けられるのは。でも今は別の意味で怖い。

だめだ。

これ以降考えると自己嫌悪に陥って、しばらくは浮上できなくなってしまう。やめた。考えるのは。

ああ、本気でのぼせそう。そろそろ出よう。そう思って立ち上がりかけたとき、

「 ヲエガ様、寒い！」

は？

スピカの声だった。

「寒いから良いのよ。あなた、ここの湯殿は久しぶりでしょう？
覚えてる？ 小さな頃はシリウスとプール代わりに遊んでたけれど、
傷も良くなって来たし、せっかくだから帰る前に入ってた方が良
い」

叔母の声もする。

風呂場の入り口から二つの黒い影が現れ、僕は慌てて回れ右をし
た。そしてあごまで湯につかる。

ドボンと音がして丸い波面が目の端に届く。

「熱い！」「ほらほら、肩まで浸かって！ すぐに慣れるわよ」

な、な、なんで！

スピカだけなら、いい。

はつきり言っただけの場合にはラッキーだ。彼女を風呂に誘おうなど、
変態扱いされるのがオチだった。夫婦同然なんだから、僕としては
そのくらいしても良いと思うんだけど。というか、そうしたい。で
も、彼女の性格から言っただけでも多分駄目だ。何か
の偶然を装うとか、策を練ってからで無いと。はつきり言っただけ
で向勝負は嫌われそうで怖い。

問題は、叔母。

さすがに………見たくない。想像することさえも禁忌めいたも
のを感じてしまう。万が一目にすれば変な夢でも見てうなされそう
だ。もちろん見られたくもない。もう子供の頃とは違うのだ。

………どうしよう。

出口は一カ所。通れば彼女達と鉢合わせ。せめて腰に巻く布くらは持ってくれば良かった……

僕の葛藤をよそに、女二人のおしゃべりは続く。

「ねえねえ。スピカ。シリウスってどう?」

叔母がスピカに話しかけている。

あのさ。どうって何が。予想が出来て、のぼせも手伝ってクラクラして来た。

「何がですか?」

「うふふ、もちろん閨での事よ!」

「!」

ああ……やっぱり。『あの』叔母が聞かないとは思えなかったのだ。思い返せば、成人の儀の後も何か聞きたそうにした。あの時はそれどころじゃなかったから免れたけど、落ちついた今なら聞いてもおかしくない。僕が警戒してたから、標的をスピカに変えたらしい。

「え、えつと」

「ちゃんと満足させてもらってる? 変な方向に頑張ったりしてない?」

「ま、満足?? へ、変な方向って……」

ああ、もう、一体何を聞いてるんだよ! スピカも答えちゃ駄目だ。……答えは、聞きたいけど聞きたくない!!!!

このままここに居たら耳を塞いでても聞こえてしまう。スピカの答え次第では立ち直れないぐらいに傷つく可能性がある。下手したら再起不能。恐れが興味に勝った。背に腹は代えられない。

ザバザバとわざと音を立てて泳ぐようにして出口に向かう。

「シリウス!??」

叔母から目をそらしたら、すっかりとスピカが目に入った。彼女は唾然として隠す事も忘れていた。闇夜でも分かる、そのきれいな胸の形。頭の血が沸点に達した気がした。

あれ？

次の瞬間、天と地が逆転した。

*

遠くで声が聞こえる。背中が痛い。

「ちゃんと育ってはいえるみたいねえ」

「ど、どこを見て、え、見ちゃったんですか!？」

「なに怒ってるの。私はこの子の叔母よ叔母！別に見たからってなんて事無いじゃない。だいたい男の裸くらいで動揺するような歳でもないわ。あなたこそ何よ、今更そんなに動揺しちゃって」

「……………」

見なくてもスピカがどんな顔してるか想像できた。ああ……………なんだからもう、どうでもいい感じ。

「ああ、それじゃあ介抱お願いね。侍従を呼んでも良いけど、どうする？ どうせ自分でやりたいでしょ？」

「念のため……………お医者様呼んで来てくださいますか？」

「分かったわ。……………のぼせただけだと思うけど」

足音が遠ざかる。それと同時に唇に冷たくて柔らかい物が触れた。口の中に水が流れ込む。

あれ……………これって……………もしかして。覚えのある甘い感覚を確かめたくて、目を開けようとすするけれど、瞼が重くて開けられない。手を伸ばしたいけれど、だるくて駄目だった。意識が体の少し上を漂ってるような感覚だった。

水は甘く体に染み渡る。のどの渇きよりももっとひどい渇きが胸に広がって、焼け付くようだった。

ずっとこうしたかった。でも出来なかった。

この唇が、最後に触れた場所を思い出すと、優しく触れるだけではすまない気がした。彼女の全てを奪い尽くすような、そんなことしか出来ない気がした。

ごめん、スピカ。僕はやっぱりあの事を忘れられない。あの口づけが忘れられない。今でもその唇の上にアイツの印が残ってるような、そんな気がしてならないんだ。

アイツが笑う。情けない僕を見て笑う。その残像をどうしても消し去れない。

君を好きだという気持ちと同じくらいの強さで、あの口づけが憎くてたまらない。その愛らしい唇が憎くてたまらなかった。

いつもは隠し通してるはずなのに、今は……どこか掩たがが外れたように、どこまでもそんな気持ちが流れ出て行くような気がした。

どうか。この気持ちが彼女から隠せていますように。

甘く可愛らしい口づけが続く。熱に浮かされる。ともすればすぐに手放しそうな意識の中で僕はそれだけを必死で祈った。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2029e/>

真昼の星のその下で

2009年4月30日08時00分発行